

はばたくなら ①④

積み重ねた経験が導く保育 ～つながり合い、共に育ち合う 保育を目指して～

取組について

■本園は0歳から5歳児までが一緒に過ごす一体化園であり、以前より異年齢交流を大切にしてきた。いろいろな友達と自然に関わり、刺激を受け合える環境の中で、優しさや憧れ、思いやりの心が育っていく姿が多く見られていた。本園では、「遊びを通して子ども同士の心をつなぎ、豊かな心を育むこと」を目指して、保育を進めてきた。

新型コロナウイルス感染症の流行期間中は異年齢での交流が制限され、子ども同士の関わりが減少しただけでなく、職員間でも他クラスの子どもの様子や成長が見えにくくなり、情報共有が不足する場面が増えた。こうした課題に対応するため、これまで大切にしてきた取組を見直し、理解をより一層深めるために試行錯誤を重ねてきた。具体的には、子どもたちが夢中になって遊ぶ姿について保育者間で話し合う取組を進め、子ども一人一人の成長や遊びに対する洞察を深め、保育の質向上に努めてきた。

昨年度、新型コロナウイルスの感染症分類が5類に引き下げられたことで、異年齢交流が再び活発になった。年上の子どもたちは遊びや生活の中で自然にリーダーシップを発揮し、相手を思いやる心が育まれている。また、年下の子どもたちは年上の友達の存在に安心感や憧れを抱いている。異年齢での交流を大切にしながら、保育者同士が気づいた大切なこと、すなわち子ども一人一人の成長や遊びの見取りに対する理解を基にした保育の実践を両立させ、より充実した保育環境を築いていきたいと考える。

この取組を通して・・・

○コロナ禍での影響を受けた様々な課題に直面しながらも、職員同士で向き合い、試行錯誤を重ねてきた。また、その中で得られた気づきや学びを職員同士で話し合い、子どもたちへの理解を深めてきた。一方で、時期によって継続的に進めることが難しい場面があり、その課題に向き合いながら、保育の根底にある大切な思いを見失わずにつないでいきたい。

○職員同士の話し合いや意見の共有により、さまざまな視点から子どもたちの成長を見つめることで、一人一人の興味や関心を深く理解することができた。また、心の動きを捉えた遊びの展開が、学びにつながる事が分かり、そのために保育者ができることが具体化され、次の日の保育に活かされるようになった。

○異年齢交流の積み重ねと、保育者同士が理解を深めてきたことにより、自然と異年齢の子どもたちが関わり合って遊ぶ姿につながった。その中で、年上の友達の優しさや強さに憧れをもち、「すごいなあ」「同じようにやってみたい」という気持ちが芽生え、主体的に、また優しさをもって行動できるようになってきている。今後もこうした異年齢交流を大切にしながら、子どもたちが刺激を受け合って過ごせるような環境をつくっていきたい。

保育者の探求の歩み

本園では新型コロナ流行前より、子どもの姿や興味を捉え、遊びの発展や、遊びの中でどんな育ちが見えるかを話し合う大切な場をつくってきた。その取組は試行錯誤を重ね、形を変えながら今日に至っている。

第1セクション（初期の形） ※この取組は、5年間にわたり行われてきた。

各クラスの子どもたちの気づきや遊びの発展を記録した表（わくわ〜くしーと）を、全職員が目に触れる場所に掲示し、これを基に保育者間で話し合う時間を始めた。

一週間ごとに表を作り、各クラス記入



子どもがワクワクし、興味をもって活動する姿を捉えた写真を貼り付けている。
※明日はどのような環境を用意するのか、考えたことを赤字で記入

《良かった点》

- ・他のクラスの遊びや様子が分かり、共通理解につながった。
- ・遊びが始まるきっかけや保育者が意図して行うことなど、視覚的に共有することで、職員全体の理解が深まった。

《少しずつ、課題も見えてきた・・・》

- ・写真を貼る時間を確保できず、何も貼らないまま時間が過ぎてしまうこともあった。
- ・年度が替わる際の職員異動によって、取組の意図や大切にしたいこと等が共有されず、職員間に戸惑いが生じることがあった。

大切な思いは引き継ぎながら、その時々で話し合って柔軟に形を変えつつ、より深まるようにしていこう！

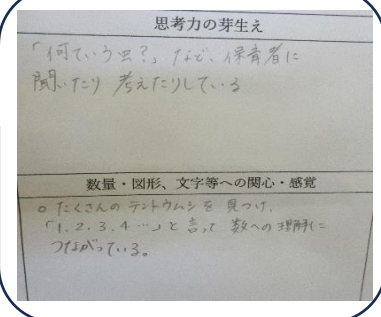
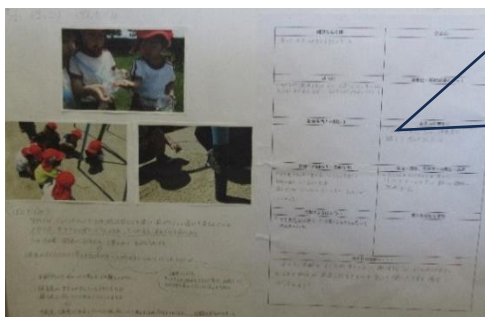
一つの遊びをピックアップして話し合うことで、具体的な手立てやアイデアが生まれるのでは？話し合いを深めていくことで、自身の学びにもつながっていくはず！



第2セクション（形の変化） ※この取組は2年間、継続している。

一つの遊びをピックアップして深く掘り下げ、子どもたちの気づきや保育者の意図が明確になるような話し合い（ほっこりたいむ）を促進する取組を開始した。この取組を通して互いの経験や視点が交わり、多角的な意見を出し合うことで、子どもたちの興味や関心をしっかりと捉え、次の日の保育に活かされている。また、子どもたちが夢中になって遊ぶ中でどんな力が育っているのか気づくきっかけにもなっている。こうしたプロセスが、保育者の子どもへの理解を深める大きな手助けとなっている。

※新たな形の『わくわ〜くシート』



実践事例 『わくわくらんど』－笑顔が広がる異年齢交流－

『わくわくらんど』は、5歳児の子どもたちがリードしながら体操や触れ合い遊びを楽しみ笑顔あふれる場となっている。また、この活動は子どもたちにとって異年齢の友達と触れ合い交流を深める楽しい時間となり、クラスを越えたつながりを築ききっかけにもなっている。

5歳児が前に立ち、体操をしている。年下の子どもたちは集中してその動きを見つめ、真似しながら楽しんでいる。



異年齢での関わりが深まるよう、縦割りのグループに分かれ、円を作って一緒に体操を楽しむ形に・・・近くにいる安心感から笑顔で体操を楽しむようになった。



触れ合い遊びでは、最初は恥ずかしさや戸惑いを感じる子もいた。年上の友達の優しさに触れ、少しずつ安心した表情が見られるようになり・・・



経験を重ねるごとに、子どもたちの気持ちがほぐれ、自然と笑顔が広がった。今では、積極的にみんなを手をつなぎ、楽しむ姿が見られるようになった。



『わくわくらんど』の積み重ねによる、子どもの成長

異年齢交流を重ねる中で、子どもたちは互いに刺激を受けながら関わりを深めている。特に、年上の子どもたちが見せるリーダーシップや思いやりが、年下の子どもたちにとって大きな安心感となり、憧れの気持ちから、「同じようにやってみたい」という意欲にもつながってきている。今後も異年齢の関わりが自然に生まれ、深まっていくような環境を目指し、日々の遊びや生活の中で、年齢やクラスを超えて関わり合えるように工夫していきたい。

実践事例 『ほっこりたいむ』で深まる子どもへの理解

※わくわ〜くし〜とを用い、具体的な遊びをピックアップして話し合う時間



《子どもの姿からの読み取り》

戸外ではテントウムシやダンゴムシなど、虫探しに夢中になる子どもたち・・・一人が見つけると、周りの子どもたちも次々と集まり、興味が広がってきている。観察ケースに何匹もの生きものを入れて、その動きをじっくりと見つめている。

楽しさや驚きなど、生きものを共通の話題として言葉で思いを伝え合っている。(言葉による伝え合い)

走ったり、しゃがみこんだりして、虫を探している。(健康な心と体)

テントウムシを「1、2、3・・・」と言って、数への理解にもつながっている(数量への関心・感覚)

担任の思い

「何に心を動かされ、どのような育ちにつながっていくのか知りたい」
「小さな生きものとの関わりを通して、命の大切さにも気づいてほしい」

異年齢での交流を通して、生きものに対する発見や考えを分かち合うことで、気づきや新しい興味が生まれるかもしれません!



3歳児には命について深く考えるのは難しいかもしれませんが生きものとの関わりを通して少しずつ命の大切さに触れていくことが大事ですね。

《話し合いからの気付き・次の日の保育に向けて・・・》

・先生方からのさまざまな意見を聞くことで、子どもたちの成長の様々な側面に気づくことができた。生きものとの関わりは、自然に触れるだけでなく、発見したことや感じたことを伝え合う経験を積み重ねたり、数量への理解にもつながったりすることを踏まえて、今後も子どもたちの興味や関心を広げ、様々な力を育てていきたい。

・他クラスの子どもたちも同じように生きものに興味をもち、関わりを楽しんでいることを知れた。異年齢の子どもたちと関わることで、新たな発見や学びが生まれることを考慮し、焦らずに、時間をかけて経験を積み重ねることを大切にしながら、子どもたちが自分で気づきを得られるようにしていきたい。

話し合いから生まれた、豊かな経験

他のクラスで飼育している生きものを見せてもらう機会をもつことができた。年上の友達に、「ザリガニのハサミは強いから一緒に見よう」と優しく手をつないでもらったり、一緒にアゲハチョウを自然に戻したりする経験が大きな刺激となり、更に生きものへの興味が大きくなっていった。こうした年上の友達の優しい姿に触れることで、子どもたちもその優しさを感じ取り、生きものや友達を大切にすることが育っていくことを願っている。



一緒に見たら、大丈夫!

チョウチョさん、元気でね〜



わくわ〜くシートから得られた成果

写真を見ながら話し合うことで、子どもたちが夢中になって遊ぶ姿や、その中から見えてくる興味を共有しやすくなり、保育者同士の意見交換が活発に行われた。また、写真を通して具体的な場面を振り返ることで、子どもたちの成長を多角的に捉えることができ、理解をより深めることができた。

まとめ (成果)

■園の歩みとともに、「遊びを通して子ども同士の思いをつなぎ、豊かな心を育むこと」を目指し、その思いを受け継ぎながら保育を積み重ねてきた。そのために、『わくわくシート』の活用方法を見直し、工夫を重ねることで、職員間の理解が深まり、保育の質の向上につながっている。今後も試行錯誤を重ねながら、子どもたちが主体的に育つ環境を築いていきたい。

■異年齢交流を大切にし、子どもたちが互いに刺激を受けながら成長できる環境を整えてきた。コロナ禍での制限を経て、交流が再開されたことで、年上の子どもは自然とリーダーシップを発揮し、年下の子どもは安心感や憧れを抱く姿が増えてきている。また、日常の遊びの中でも異年齢のつながりが生まれるよう環境を工夫し、関わりを深めることで、思いやりや主体性を育むことができた。今後もこの積み重ねを大切にしながら、交流の機会を広げていきたい。

(課題)

■年度ごとに職員が入れ替わる中で、これまで積み重ねてきた保育の考えや方法をどのように伝え、つないでいくかが大切になる。今後も、これまでの経験を振り返り、話し合いを重ねながら、継続的により良い保育へとつなげていきたい。

■異年齢交流の中で、子どもたちは互いに刺激を受けながら成長していく。その関わりをより豊かにするためには、保育者が環境を整え、子ども同士が安心してつながることができるよう丁寧に関わることが大切である。また、子どもたちの関わりの中でどのような気づきを得ているのかを見取り、それぞれの心の変化を大切にすることも必要である。今後も、子どもたちの内面の育ちを支えながら、異年齢のつながりを深めていきたい。

